

技術を活かし仕事の意義を深める 「見える喜び」 難民視力支援活動の真髄

株式会社富士メガネ 代表取締役会長・社長兼任
金井 昭雄氏

近年、世界では難民問題が深刻化している。その数は、過去最悪に達すると国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は警告する。専門知識に基づく総合的視力ケアを提供する富士メガネでは、1984年からCZエフコと協働し、海外難民への視力支援活動を実施。2006年には、同社の会長・社長兼任 金井昭雄氏が、日本人初の「ナンセン難民賞（※）」を受賞した。同社においてミッションと呼ばれ、30年以上に渡り実施されている支援活動について、金井氏に聞いた。

※1954年に、難民の窮状に焦点を当てるため、多大な貢献をした個人または団体を称える目的で創設、難民支援のノーベル賞とも言われる。

技術と親切が土台となる

― 創業者、金井武雄さんは、金井さんのお父様でいらっしゃいますね。

金井 父は、当時日本領だった南樺太の町、豊原（※1）で、1939年に、4坪半の店「富士眼鏡商会」を開きました。1942年には、そ

こでわたしが生まれたんです。― もともと、ご出身は、どちらだったんですか？

金井 祖父は新潟出身で、北海道の開拓で、日本で一番寒い陸別からさらに10キロの上陸別に入植。木を切り倒し石を掘り起こして畑を作り、それは貧しい生活だったそうです。

父は、祖母の意向で、雑貨屋に丁稚奉公に出ました。そこで、簿記を勉強し真剣に働いたんですが、なぜか注文を取り違ってしまう。聴力が弱いことが原因だとわかり、帯広の眼鏡店で働くことになりました。それがメガネとの出会いです。

― そこで、メガネのビジネスを覚えられたんですね。

金井 もっぱら地方で売り歩き、宿ではお客さんや女将さん、JRに乗れば隣のお客さんにメガネを売ったとか。臆さないというか、あとがないと必死だったんでしょう。その精神は、ゆとりができて変わらず、なんでもやりました。

29歳で創業したんですが、戦争がたかまり1944年に徴兵、静岡で戦闘機の整備につきました。その間、母が店を守っていました。国の統制経済（※2）で店舗は接収。商品は買い上げられて、それが6万5千円になりました。

― 今だと、どれくらいでしょうか？

金井 4、5千万円くらいですか。父は、終戦後陸別へ戻ると店舗探しを始めたんですが、新聞で、海外資産の預金口座凍結の記事を見つけて、すぐに振替えの手続きをしました。その直後に口座は凍結。すんでのところで手にしたその資金を全部はたいて、札幌の狸小路4丁目に店舗を買いました。

― 狸小路といえば、東京の銀座のような場所。そこで、戦後半年でお店を再開するとは、すごい判断力と行動力ですね。

金井 父は神経質ですが、このビジネスに関して、誰よりもすばやい判断力や行動力がありました。

※1 日本領有下における南樺太の政治・経済・文化の中心

※2 戦争時に、国家がとる産業・経済への直接的統制



—まさに第二の創業。もののない時代で、どうされたんですか？

金井 多かったのは壊れたメガネの修理。父は無料に近い形で修理しました。それで、親切なメガネ屋さんという噂が広まり、営業力をつけていきました。

—サービスという言葉のない時代ですが、お客様への親切を一番に考えましたね。

金井 家では、すべてのお金と時間を事業につぎ込んで、お正月なのに

餅もみかんもなかった。金井さんはいつ寝ているのかといわれました。

—一筋に仕事に励み、仕事が人生そのものだったんですね。

金井 樺太時代ですが、アメリカ人の、わたしと同じオプトメトリスト（※3）が、視力を測る検査機の会社から派遣されて、新潟で研修会をやりました。父は豊原から出かけていって、視力検査の技法や知識を自主的に学びました。そのときに得た検査法が「レチノスコープ」で、光を目のなかで動かすと、網膜に当たる影の動きで、近視や遠視、乱視がわかります。原理を学んだ父は、そのスキルたるや、黙って座ればピタリと当たるほど。技術レベルが高かったので、樺太で評判になったそうです。

—研究熱心で、常にスキルを磨かれた。だからこそ、狸小路に打っ

て出る自信もありだった。

金井 日本人はほとんど近視ですが、父は、遠視の検出や、斜視や両方の眼の度数が違う場合など、幅広い視力ケアができるセルフメイドの技術を持っていました。アメリカ人のオプトメトリストから学んだ人なら、やろうと思えばできたのに、ほとんど誰もしなかった。父は興味を持つたんです。学理的で科学的なんです。初歩的だったけれど、理念と実践する知識・体系を持っていたので、コンピュータのない時代に威力を発揮しました。それが富士メガネの基礎なんです。

—まさにプロフェッショナル！

金井 同時に、メガネをどうやって売り込もうかと、レンズやフレームの独自のデザインを考え、自社製品も開発しました。宣伝広告ではキャッチフレーズを発案し、店作りや照明も考えて、コンクールで賞を取ったこともあります。とにかく熱心な人でしたね。

—熱心といえば、お父様は、松下幸之助さんに、メガネが合っていないと進言なさったとか。

金井 新幹線開通式のテレビで、ティップカットする松下さんのメガネがずり落ちていたので、「直されたらどうですか」と手紙を書いたんです。そのあとご縁があつて来店されたとき、松下さんは、メガネ店はフレームにレンズを入れるハードウェアの店くらいに考えていたんですよ。ところが繁盛する店で、父や沢山の社員がきびきびと働いて度数を検出し、いいメガネを作っていた。松下さんは、すぐに理解されたんだと思います。

—プロの誇りと矜持を見抜き、それで「世界一のメガネ屋さんだ」と。

オプトメトリストを目指す

—金井さんがアメリカで「オプトメトリー」を勉強されたのは、そんなお父様の影響なんですね。

金井 父はそれなりに極めたけれ

※3 「オプトメトリー」とは眼科学と光学の総合的な学問で、この分野の学位を得た者を「オプトメトリスト（検眼医）」という。欧米では医師に匹敵する国家資格。

NANSEN REFUGEE AWARD



2016年10月3日、スイス・ジュネーヴUNHCRの
「ナンセン難民賞」授賞式にて（右より四人目）

ました。

— 大学を出てさらに6年。文化系だったのに、理科は得意でしたか？

金井 これが最悪。ダメな化学は入門コースから始めて、生物学、細菌学はもっと大変。講義を録音していいかと聞くと、わからないならやめなさいと教授に言われて、奮起しました。最後は17、8人中で2番でしたね。

— 頑張りましたね。ところで、アメリカはベトナム戦争のころ、どんな生活でしたか？

思いますね。

— 自分のしたかった勉強を、息子さんが極めたんですから、お父様はさぞ嬉しかったでしょう。

金井 残念ながら、両親は、卒業式に來られなかったけれど、イングリッシュさんは、学校の事務長でしたから卒業証書を渡す役割で、泣いてました。

— アメリカでは、ボランティア体験もなさったとか。

金井 卒業して1年間アメリカで働いたんですが、同僚から誘われ、アリゾナ州フラッグスタッフのネイティブアメリカンの居留地に行きました。視力検査をしてメガネをあげるんですが、大変感謝され感動しました。それがボランティアの原点です。

オプトメトリーは、最後にはメガネをあげますが、それだけではないんです。メガネの役割は視力の回復と補正。それによって生活の質が変わります。見えることで自立できる

よようになるんです。サービスに社会性があるって役に立つ。地味ですけど仕事の意味を感じました。

— ぎゅっと充実した6年でしたね。その後日本に戻られて、お父様の会社に入られたんですね。

金井 店では、オプトメトリーの理念の入り口みたいなことをやってましたが、繁盛していて、土曜・日曜には、お客様が100人、150人と押し寄せて来ていました。

— 札幌では、有名になっていたんですね。

金井 検査の点ではそうだと思えます。度数の検出に関して、父は、わたしの10倍くらいのスキルを持っていました。今やっているサージの深み・幅とは違いますが、当時としては、精いっぱいだったと思います。そこでわたしは、だんだんと、総合的なサージ、パッケージ化のための勉強会を始めました。日本語のテキストがないので、自分で作りましたよ。もちろん法律があ

ど、いろんな複雑な事例があって、わからないことはたくさんありました。それで、1966年に、わたしが大学を出ると「アメリカで勉強して来い」といったんです。大学が商学部で、理系の単位が足らなかったで、ブレ・オプトメトリーという2年の課程を経て、専門を4年やり

金井 イングリッシュさんという、娘ふたりと息子のいる白人家庭の家で、世話になりました。ファミリー（極東）といわれた国の、見知らぬ人間を受け入れてくれた家族のおかげで、外国での生活に耐えられました。アメリカ人は懐が深いなと

りますから、眼科専門医の指導を仰いでいます。

—お医者さまとの連携があるので
すね。

金井 高齢化のヘルスケアの面
ありますね。糖尿病や高血圧、動脈
硬化がありますが、これらの生活習
慣病は、血液や血管の病気になるま
す。脳や眼底には超密な血管のネッ
トワークがあるので、詰まったり
破れたりして出血する。日本でも、
この傾向は変わりありません。毎年
スクリーニングで、3000人前後
の人を眼科に紹介しています。

—まさにプライマリケア。

金井 そうなんです。次男は、カリ
フォルニア大学バークレー校オプ
トメトリスクールのプライマリ
ケア専門の臨床助教授です。

アメリカでは、4万人以上いるオ
プトメトリストが、スクリーニング
で予防医学的な早期発見、早期対応
的な役割を担っています。

—日本ではないですね。

金井 いまの健康保険制度ではで
きませんし、誰にも義務はありま
せんが、我々のところに来られた
場合には、スクリーニング的なサ
ビスも一部可能です。脳腫瘍みた
いな事例が、年に1、2回ですが、
無い込んでくることもあります。

—目は健康の入り口ですね。認識を
新たにしました！

難民視力支援活動がはじまる

—1983年の富士メガネ創業45
周年のとき、金井さんは、お父様
と、当時社長だったお兄様に提案
し、タイでのインドシナ難民視力支
援活動を始められました。きっかけ
は、タイからの要請だそうです？

金井 当時は第三国定住ルールが
あり、タイ政府は、難民が第三国
に行くまでの間キャンプを開いて、
そこに国連機関が入り、難民認定や
第三国定住の斡旋をしていました。
キャンプは7、8か所あり、カンボ

ジア人、ラオス人（平野部及び山
岳民族）、ヴェトナムボートピープ
ル等が保護されていたんです。

そこから第三国に向かうときに、
視力障害がある行った先で苦労
するので、視力補正してほしいと
いう要請が、創業45周年の2、3
年前にあり、メガネをあげたこと
がありました。本来は行かなくちゃ
ダメだと思ったけれど、踏ん切りが
つかなかった。それを45周年で決心
しました。

—社員が怖がるのを、社命で行かせ
たとか（笑）。

金井 地面にでも寝られる屈強な
人を選びましたよ。タイもまだ発展
途上で、空港もバラックのような建
物でした。

—メガネを空港の税関で没収され
たりして、問題が起きたんですね。

金井 現地のパートナーが、我々の
ために世話をしてくれるような人
じゃなかったの、メガネを取り戻
したりして、一週間遅れてしまい

ました。現地では、CZエフのメ
ディカルコーディネーターが待つて
いて、外来クリニックの一部を借り
て機材を設置し、手探り状態ではじ
めました。

鉄条網が二重に張り巡らされ、
ゲートにはタイの兵隊が銃を持って
立っていました。暑さと埃と強烈な
においがして、異様な世界。「こん
なところがあつたんだ」、「日本は、
平和にとっぴりつかつていたんだ」
と思いましたよ。

—日本にいては、決して知ることの
ない体験ですね。

金井 メガネは新しいもの1000
組用意して、7割が近視、3割が遠
視や老眼等で持つて行つたんです
が、現地では逆でした。多くが老眼
と遠視だったので、あわててバンコ
クに戻って、メーカーのラボでメガ
ネを作りました。それでも間に合わ
なくて、日本に帰って作りました。

実は、はじめは500組と思つた
んですが、父に、もう500組持つ
ていけといわれました。父の方が
太っ腹でしたね。

―メガネをもらった方は、想像以上の喜びでしょうね。

金井 手紙や本を読んだり、刺繍をする人も多いので手作業をするときには、不自由していたと思います。強度の近視や乱視、遠視の子どももいました。遠視が強いと、目が内側に寄るケースが多いんです。アゼルバイジャンには、そんな子どもがいて、メガネをかけると魔法のように治るんです。昔は、白内障の術後に厚いレンズのメガネをかけたんですが、メガネのないおばあさんにメガネをかけさせたら、ぱっと見えるようになって大喜び。そういうときは、ほんとに役にたっているなと感じますね。

―一気に見えるようになったら、生活も、文字通り明るくなりますよね。人生が変わります。

金井 メガネなしで、よく今まで生活できたと思う事例もあります。アゼルバイジャンでは、遠視の学校の先生がいたんですが、40歳くら

いで自分の教える指導書の字が読めなくなりました。でも、メガネが作れないために、教えることもできない。メガネをあげたら見えるようになって、将来を担う子どもたちに誇りを持って生きるよう、また指導できると、喜んでいました。

―お父様は、そういった報告を楽しみになさったでしょうね。

金井 自分も若かったら行きたかった、と言っていました。中国残留孤児(※4)の方が来られたときには、検査の現場に来てましたよ。

父も引揚者で少し、困っている人がいたら、手を差し伸べる気持ちは強かったですね。

―そんなお父様の背中が、有形無形に大きく影響してられるんですね。

ナンセン難民賞から10年

―第1回目の難民支援のあと、1984年からは、CZEWとの協力のもとに支援活動を継続していらっしやいます。タイ、ネパール、

アルメニア、アゼルバイジャンなどで、すでに30年以上になりますね。今年も5月にアゼルバイジャンに2週間、いらしたとか。

金井 親子3人と社員3人の6人で行こうと、1年前から準備していました。オプトメトリストのふたりの息子(※5)と行くのは、初めてです。わたしの夢もありました。

―ついにその夢が実現ですね！ 2代3人のオプトメトリストは珍しいではありませんか。

金井 そうみたいです。ところが4月2日に、ナゴルノ・カラバフで軍事衝突があり、何十人も死亡したと報道されたんです。その後2、3週間で状況は落ち着いてきたけれど、チームの安全も考えて迷いましたが、衝突は局地的だということで行くことにしました。

それともうひとつ、毎年10月3日に、スイス・ジュネーブで、CZEWの「ナンセン難民賞」授賞式があります。そこで、わたし自身の受賞から10年、まだ現役でやっ

ている事例としてスポットライトを当てたいと、本部から現地取材を依頼されていたんです。取材スタッフも来るので、行かない訳には行きません(笑)。その活動の映像が、授賞式で紹介されました。

―富士メガネさんでは、送ったメガネは約15万組。回数は34回以上、参加した社員ボランティアは延べ177名。こうした活動だけでも真似できないのに、驚いたのは、2013年には、海外難民支援におけるCZEWとの協働関係30周年を記念し、10年間で総額100万ドルの寄付を発表されたこと。百万ドルといえば、一億円以上です！

金井 売上金の一部から毎年10万ドルで10年間。すでに4年間やりました。

―きっかけは、どのような？

金井 当時の国連難民高等弁務官アントニオ・グテレスさんが、シリア問題が起きたときに、資金が必要だということで寄付を申し出たんです。

※4 富士メガネでは1987年から、毎年、日本を訪れる中国残留日本人孤児のために、視力の確認と眼鏡を寄贈している。

かない・あきお

1942年樺太豊原市生まれ。1966年早稲田大学商学部卒業。1972年サザン・カリフォルニア・カレッジ・オブ・オプトメトリー卒業。カリフォルニア州オプトメトリー営業ライセンス取得。

1973年日本に帰国、富士メガネ入社。1996年富士メガネ社長就任。2006年富士メガネ会長に就任、国連難民高等弁務官「ナンセン難民賞」で日本人初の受賞。2007年富士メガネ会長・社長を兼任。

2009年緑綬褒章を受章。2012年渋沢栄一賞を受賞。

日本眼鏡技術者協会会長代行、WCO（世界オプトメトリー会議）理事、WOF（世界オプトメトリー財団）理事、APCO（アジア太平洋オプトメトリー会議）会長などを務めた。

現在、富士メガネ「海外難民・国内避難民視力支援ミッション」代表、グローバルコンパクト・ジャパン・ネットワーク理事、国連 UNHCR 協会理事、マーシャル B. ケッチャム大学（米国カリフォルニア州）理事

「グテールスさんといえば、今度、潘基文さんの後任で、国連事務総長になる方です。」

金井 ええ、ポルトガルの元首相で、小柄ですがエネルギーのある方です。彼の想いは、まさに難民がテーマですから、問題解決に全力を尽くしてやるというメッセージは、力強いですね。

「世界では、難民問題がますます深刻化していて、いまや過去最悪の難民危機となっています。」

金井 グテールスさんは、企業が独自のサービスやファイナンス面でサポートしてくれる関係は、大歓迎だと喜んでくれました。普通、ドナーは目的を限定するんです。例えば1千万で教育に使えとか、どこの国の何に使えとか。これだと会計処理が難しく、報告書が必要です。わたしは「好きなように使ってください」と言ったので、さらに喜ばれました。7月に、CNECの副高等弁務官が来日し、日本の民間企業とのパー

トナリシップを強化するためのシンポジウムがありました。富士メガネは、「国連のグローバル・コンパクト」に加盟しローカルネットワークの理事でもあるので、わたしはそこで実例として話をしましたが、日本では、現場を知らないこともあって、難民危機への理解がまだ深まっていない現状があります。

今度、ニューヨークに行ったときには、グテールスさんに会いたいですね。

「嬉しい再会になりますね！最後に、未来に向かっての抱負を、お聞かせください？」

金井 来年も予定しているので、親子3人揃ってミッションに行ければいいと思います。世界情勢が変化しているのも、将来はどうなるかわかりませんが、メガネを送るなど、行かなくてもできるサポートもあります。ビジネスとしては、価格競争が厳しい世界ですから、既存店レベルで、堅実にお客様の数を伸ばしていくような、支持される会社になく

「店舗には募金箱（※6）や支援の様子の写真などもおいていらっします。本業と社会貢献がいい好循環になり、社員が誇りを持ち、顧客や地域から信頼されるプロセスがよく理解できました。」

金井 難民への視力支援の体験をすると、メガネの持つ力、仕事の本質、社会的使命がわかりますから、会社の社風とか、仕事に取り組む姿勢がしっかりとくると思います。

「モノが見えることで、人生を助けることもできる」と創業者の金井武雄さんが、常々おっしゃっていたそうです。オプトメトリストとしての仕事の意義と使命をしっかりと心に刻んで、難民への支援活動を誠実に、力強く推進してこられた金井さんの想いと覚悟にノックアウトされました。

今日はありがとうございました。

（2016年12月6日札幌市内、株式会社富士メガネグランドホテル前店にて）

インタビュ-

公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長 高橋陽子

※5 長男は金井宏将氏（富士メガネ副社長）、次男は金井邦容氏（カリフォルニア大学バークレー校オプトメトリースクール研修医管理部長 臨床助教授）

※6 「国連難民募金箱」と盲導犬育成支援「ミーナの募金箱」を設置。